



CHRONICLE
OF MIE
VOL.4
【美術編】

山口泰弘 やまぐちやすひろ
教育学部・美術教育講座教授
専門は江戸時代絵画史

伊勢津藩の初代藩主、藤堂高虎。その晩年を描いた肖像画は、堂々たる風格を現代に伝えてくれる。一代で二国の主となった高虎は、死後、藩士たちに神格化され、像は礼拝の対象ともされていた。

藤堂高虎像



藤堂高虎像

江戸時代・17世紀前期 絹本着色 86.8×39.4cm
藤堂高正氏蔵

高虎(1556~1630)は、戦国時代から江戸時代初期の武将。近江の土豪の次男として生まれ、浅井・羽柴(豊臣)に仕え、後に伊勢津藩32万石の初代藩主となった。図上部には、幕政初期に徳川家康のブレンとして活躍した僧天海の讃がある。高虎・天海ともに家康の信頼が厚く、日光東照宮の家康廟には、ふたりの彫像が左右に安置されている。

津藩の藩祖藤堂高虎(1556~1630)は、晩年、自ら命じて3幅の肖像画を描かせた。藩史『宗国史』(藤堂高文編・1751年自序)の伝えるところであるが、一介の土豪に生まれて大藩の創始者となった激動の人生を振り返り、またその自負から、生き写しの姿を未来永劫に伝えることを望んだのだろう。

像主の没後に描かれる遺像に対して、生前の肖像画を寿像と呼ぶ。画師が像主に相対して写生を行うのは今も昔も変わらないが、江戸時代以前、肖像画制作は、現代の眼にはやや異質に映る制作過程を採るのが一般的であった。まず下絵を作成したあと何段階かにわたって修正を加え、最後に完成作品制作に使用するための専用下絵を作るのが異なる。最終段階の下絵を「紙形」というが、念紙と呼ばれる一種のカーボン紙を使って、この紙形の図柄を敷き写しするという方法が採られた。つまり、紙形が一つあれば、同一図様の画がいくらかでも転写されるのである。高虎が描かせた寿像3幅も、一枚の紙形からつくられた同一図様のものであったと考えて間違いない。

残念なことに、高虎が描かせた寿像3幅そのものは、すでに失われた可能性が高い。寿像であるからには、生前の姿をありのまま未来に伝えるという性格上、像主を精確に写しているはずである。高虎の実像を知るという意味では、寿像3幅の遺失は惜しまれる。しかし寿像3幅と共通の紙形で描かれた画がほかにあれば話は別である。そんな期待に答えてくれ

るのが、今回紹介する作品である。像主高虎は、東帯(※1)に身を包んだ晴れの姿で上畳に座る。面貌は、上まぶたが濃い墨線で見られるほかは、肌の色の上に薄い墨線で精細に描かれている。額や口元の皺、頬から顎にかけての皮膚の弛み、目頭や目尻の小皺までもが手数を省かず克明に書き出されている。さらに胡粉(※2)を使って、頭髪のほか、眉、口髭、伸びかけの頬髭まで余さず描かれる。血色を失っているもののしっかりと両



高山公画像(部分)
江戸時代・17世紀前期 絹本着色 80.7×39.7cm
三重県立図書館蔵

端を結んだ口、切れ長の眼光鋭い目など、人生を深く刻み込んだ風格を遺憾なく伝えてくれる。

藤堂藩初期資料『公室年譜略』(喜田村矩常編・1775年自序)の第18巻は、高虎の容姿の記述から始まる。身の丈6尺2寸とあるから、190cmにもなるという堂々たる偉丈夫であったらしい。また面貌は、「面柔和ニシテ色赤ク鼻高ク耳ハ

勝レテ大キ」だったという。画に描かれた、やや起伏のある高い鼻梁と大きな耳は、この記述と合致する。

高虎の肖像画は、紹介したものと同図様の寿像4点のほか、遺像を含めて9点ほどの現存が確認されている。しかし、藩政時代にはこれを遙かにしのぐ数の像が家臣のもとに家蔵されていたことが、資料から明らかになっている。それらは、正月、あるいは毎月5日の高虎の命日毎に礼拝された。単なる肖像画ではなく、礼拝像として神格が与えられていた点で、豊臣秀吉を豊国大明神、徳川家康を東照大権現として描いた神像と軌を一にする。

高虎が思い至った寿像制作は、結果なのか、意図するところであったのかはわからないが、いずれにせよ、藩内の結びつきをより強固にするにふさわしい礼拝の対象として受容され、藩士諸家に長く守り伝えられることになった。土豪から成り上がって一国を支配するに至った人物の姿は、こうして死後も永く伝えられることになった。その威武の前に家臣たちを平伏させたことだろう。

『宗国史』の著者は、1749年4月5日、高虎の命日に、寿像3幅の一つを拝礼する機会を得た。その印象を「英姿磊磊」と賛嘆を込めて同書に書き留めている。

※1 表袴(うえのはかま)ではなく指貫(さしぬき)を穿いている点、裾が描かれていない点から東帯とはいえない。どちらかといえば衣冠に近いが、衣冠ならば筋ではなく扇をもつことが通常であるため衣冠ともし難い。ここでは、『宗国史』等の呼称に合わせて便宜的に東帯と呼ぶ。

※2 貝殻を焼き、砕いて粉末にした顔料。室町時代以降、現代に至るまで、白色顔料として一般的に用いられる。



【左】紙形使用を示す瓜二つの像。ほかに2点同図様のものが現存するが、藩政時代にはほかに多くの画幅が藩士に家蔵されていた。単なる肖像画ではなく、神格化像として拝礼が行われたことが記録でわかる。(左:藤堂高正氏蔵 右:三重県立図書館蔵)

【右】寒松院(三重県津市)の高虎墓。寒松院は津藩歴代藩主の菩提所。同寺はもと昌泉院といったが、2代藩主高次が高虎の霊を祀るようになって改称された。寒松院は天海から与えられた高虎の院号。